

## 『古今和歌集』の副助詞ダニ

### 〈相対的輕少性〉の意義をめぐって

田中敏生

【論文概要】古今和歌集の副助詞ダニを取り上げて、この語の基本的意義を〈相対的輕少性〉に求めるといふ観点から、その使われ方を統一的に記述する。即ち、①願望表現、②仮定条件句、③否定述語、④肯定述語の四つの用法において、一貫してこの意義の發揮されているありさまを観察する。併せて、そこから望見される副助詞研究の課題についても些かの考えが述べられる。

【キーワード】古今集 副助詞 ダニ 相対的輕少性 群数 程度量

はじめに

本稿は、『古今和歌集』から副助詞ダニの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈相対的輕少性〉に求めるといふ観点から、その使われかたの記述を試みるものである。

ダニの基本的性質を「小」の側で捉えることは古くから行なわれてきたし、この語に複数の用法があることも昔からよく知られている。こうした研究の流れを受けてなすべきことの一つは、措定された基本義との関連において諸用法の統一的理解を図ることであり、そのためには〈相対的輕少性〉の意義を考へることが有効であろう。想定されるより大きな要因に較べて相対的に輕少な要因であることを示すという基本的意義を立てること、各種の用法を統一的に理解することができるのではないか——。そうした考え方から、これまで蜻蛉日記・枕草子・大鏡などの作品についてこの語の使われ方を見てきたが（文献⑪⑫⑬）、本稿では古今集に材を取

りながら同様の考察を試みたい。

古今集のダニについては夙く加納協三郎氏の論がある（文献④）。万葉集でダニの現われる述語は意志・命令・願望・疑問・否定・仮定等々が殆どであつてスラが肯定平叙文で自由に使えるのと大きく異なるが、古今集ではスラが後退してダニがその領分をも受け継いだというのがその大要である。より着実な徴証から始めるといふ方法的自覚のもと、述語の種類の間からダニの構文環境的な存在制約に積極的に留意しているが、そのようにして形態面をめぐる事実が明らかにされたならば、進んでさらに内面的意義の領域へと分け入ることは何にも増して魅力的なことがらであろう。意味との関連においてこそ「かたち」もまた真に存在理由を持つだろうからである。文献⑮でも古今集のダニが粗上に上り、その意味的な面にも関心が払われているが、統一的理解という点から言えば、なお考察の余地が残されているように思われる。

以下本稿では、右のような考え方のもとに、ダニの用法を次のように分

けた上で検討を進めてゆくが(注①)、それは、群数性と程度量性との二面を兼備するという意味でのこの語の副助詞性(注②)を、古今集での用例の限りに確認する作業ともなるであろう。

- (1) 願望表現とともに用いられるもの 一一例
- (2) 仮定条件句中に用いられるもの 一例
- (3) 否定述語とともに用いられるもの 一二例
- (4) 肯定述語とともに用いられるもの 四例

〔計三八例〕

### 一 願望表現・仮定条件句

願望表現とともに用いられたタニは十一例見える。一般に願望表現でタニが用いられると、願望の内容が、想定されるより大きな段階に比して相対的に小さなものでしかないことが示される。それによって、本来願わしいことから引き下がったかたちでの「せめてもの願い」を表わすことになる。所謂「最低限願望」(文献⑦、三七頁)の用法である。へ相対的軽少性」の意義が、そのようにして、最終的な文意味を形成するのに与るわけである。

願望表現の形の面に目を向けると、その内訳は次のようになる。以下この順に検討する。

- (1) 命令 五例
- (2) 意志 一例
- (3) 否定的意志 一例
- (4) 反実仮想 一例
- (5) 当為 一例
- (6) 省略 二例

〔計 一一例〕

第一に、命令文で用いられたタニは次の五例である。

- ① 散りぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時の思いでにせん (春上・四八、不知)
- ② 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風 (春下・九一、良岑宗貞)
- ③ 花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人のしるべく (冬・三三五、篁)
- ④ 空蟬は殻を見つ、もなぐさめつ深草の山煙だにたて (哀傷・八三一、僧都勝延)
- ⑤ みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ (哀傷・八四七、遍昭)

①は、梅の花はたとえ散るとしてもせめて香りだけでも残してほしいことを、②は、花の色が霞に隠されていてもせめて香りだけでも風が運んできてほしいことを、③は、花の色が雪に紛れて見えなくてもせめて香りだけでも匂い立ってほしいことを、それぞれ詠み込んでいる。いずれも、本体としての花やその色を願いながらも、それが叶わないならせめて香りだけでもといったふうに、相対的に低い段階へと引き下がった形での願望を表わしている。この点に、「相対的軽少性」の意義の發揮されているさまを観察することができるであろう。

事情は④⑤でも同じである。④は、藤原基経を深草山で茶毘に付した時に、僧都勝延の詠んだ歌である。それまでは亡骸を見ながらも慰めることができたが、もはやそれもできないので、せめて煙だけでも立ち昇ってほしい——そんな願望のありようを見て取ることができよう。故人を偲ぶよすがとして所縁のより少ない要素に、せめてその望みを託しているわけである。

また⑤は、仁明天皇の諒闇が明けたときの僧正遍昭の詠である。都の人たちは喪が明けて普段の華やかな姿になったそうだが、自分は山にこもる

出家の身で僧服のままだから、せめてその僧服の涙だけでも乾いてほしいとの趣意である。ここでも、悲しみの癒えたしとしてより軽微でしかない要素に寄りすがつての願望が読み込まれていると言えよう。

第二に、末尾に「む」を伴って意志を表わす文で用いられたものとして、次の一例がある。

⑥さ、のくまひのくま河に駒とめてしばし水飼へかけをだにみむ

(神遊びの歌・一〇八〇)

⑥は「ひるめのうた」として載せられている。万葉集(十二・三〇九七)に《さ檜隈檜隈川に馬留め馬に水かへ我よそに見む》の詠が見える(引用は新大系による)。「ひるめ」は天照大神のことであり、神が天上へ帰って行くのを慕う歌とされる。歌意は、檜隈川に馬をとめてしばらく水をやってほしい、せめてその間にお姿をなりとも拝見しようというものである。

「なるうことならずと近くにとどまっていほしいが、それが叶わぬならせめて」といった気息を感じ取られよう。ダニが「影」の軽少要因性を示すことから、そうした含意もまた生ずるわけである。

第三に、末尾に「じ」を伴って否定的意志を表わす文で用いられたものとして、次の一例がある(「じ」を有する文でダニが用いられたものも他にも三例あるが、それは否定述語の項で取り上げる)。

⑦身は捨てつ心をだにも放らさじつひにはいかゞなると知るべく

(雑体・一〇六四、興風)

⑦は誹諧歌として載せられている。歌意は、この身は捨て果てたが、ゆくゆく自分がどうなるかを見届けるために、せめて心をだけでも保っておこうというものである。身を捨てる必要がなければいちばん望ましいわけだが、そうは行かないからという点に「せめてもの願い」としてのあり方がよく見て取れよう。

第四に、反実仮想の帰結句に用いられたものが一例見える。

⑧人しれず絶えなましかばわびつ、も無き名ぞとだに言はましものを

(恋五・八一〇、伊勢)

歌意は、人知れず二人の仲が絶えたのであれば、つらいことではあるが、せめて根も葉もない噂ですと言うことができようものを、というものである。実際には人に知られているので、そんな言い繕いさえできないといった含みがある。ダニ自身は「二人の仲をずっと続けることができればそれに越したことはないが、そうは行かないのでせめて」といった気味あいをもたらずにはたらくが、反実仮想との組み合わせから、右のような文意味が醸成されるのだと言えよう。

第五に、次の例では述部に「べし」を含む文とともにダニが用いられている(注③)。

⑨春霞なに隠す覧さくら花ちる間をだにもみるべき物を

(春下・七九、貫之)

詞書に「山の桜を見て、よめる」とある。「春霞はどうして桜の花を隠すのだろう、(咲いているときはもちろんのこと)散る間をだけでも見るのがよいのに」との歌意である。ここでの「べし」には「そうするのがよい」といったほどの意味がこもっている。その意味で、実現をめぐる「望ましさ」の意味あいも備わっている。ダニは、そうした意味との関わりにおいて「せめてもの願い」を表わすのに与ると言えよう。(相対的軽少性)の意義もまた、そのような形で發揮されるわけである。

第六に、実現を願う意味を担う部分が形としては省略されているものとして、次の二例が挙げられる。

⑩飽かてこそ思はむ仲は離れなめそをだに後の忘れがたみに

(恋四・七一七、不知)

⑪それをだに思事とてわが宿を見きとな言ひそ人の聞かくに

(恋五・八一、不知)

⑩は、「お互いに想いあっている仲は、飽きの来ないうちに離れるのがよいだろう、そうすれば、せめて好い仲だったということだけでも後の

想い出にできるだろうから」といった意味を詠み込んでいる。実現を願う意味を担う形は見あたらないが、意味自体として、それを願わしいものと捉えていることは十分に明らかであろう。「好い仲がずっと続くのが何よりだが、それが叶わないなら、せめて」といった余意を汲み取ることができる。願わしさのより低い要素であることをダニが示すところから、そうした意味あいもまた生じてくるのだと言えよう。

⑩の歌意については諸説があるが（竹岡『全評釈』下、五三九頁、ひとまず旧大系に倣って「私の家を見たと言わないでください、せめてそのことを、私のことを大切に思ってください」とのしるしといたしまし「よ」の意と取ることもできる。そう考えれば、⑩と同じく実現を願う文に準じることができ。「いちばん望ましいのは二人の仲がずっと続くことだったけれども、それが叶わないなら、せめて関係を隠しておいてほしい」との趣意である。ここでもダニは、願わしさの低いほうの要素を示すのに用いられていると言えよう。

以上、願望表現とともに用いられたもの凡そ十一例について見てきた。これに対して、仮定条件句で用いられたものとして、次の一例がある。

①命だに心かなふものならば何かわかれのかなしからまし

（離別・三八七、白女）

「源のさね」が筑紫へ湯治に出かけるときに、「しろめ」という女性が山崎で別れを惜しんで詠んだ歌である（注④）。歌意は、「命だけでも思い通りになるのであれば、どうして別れが悲しいでしょう（でも実際にはそれわからないわけですから、悲しくてなりません）」というものである。仮定条件と反実仮想との組み合わせからそうした余意が形成されている。宗祇の『両度聞書』に《立かへるまでの命しらぬ心也》（竹岡『全評釈』上、九〇二頁）と注するのも、同じことがらを指そう。そうした中において、ダニ自身は、悲しみが払拭されるための要件を「命が思い通りになる」という一点へと絞り込んでいる。通俗的な幸福の諸契機はもとより、二人

が同じ場所にいるということをも捨て去って、「僅かにこのことだけでも成り立つならば（それだけでも十分に）」といった意味あいを表わすものであって、そうした意味で「最低十分条件」（注⑤）を形成していると言えよう。「相対的軽少性」の意味も、ここではそのような形で発揮されているわけである（なお、仮定条件句で用いられるダニは集中にもう一例あるが、否定との関わりを第一義とするものなので、次節で用例④として扱う）。

## 二 否定述語（其一）

否定述語（ないし否定的表現）とともに用いられるダニは、古今集中に二十二例見える。一般に否定的意味を表わす述語とともにダニが用いられると、ダニによって示された小さな要素においても述語的事態が成り立たないことが表わされ、最終的には皆無性の意味が形作られることになる。そのメカニズムは、広くは「呆れてものも言えない」「塵一つ無い」などと共通のものであるが（注⑥）、ダニの場合はそれが特に「相対的軽少性」の意義においてなされるわけである。

述部の形の面に目を向けると、その内訳は次のようになる。以下では、ダニの接する語句がどのような意味で軽少性を帯びているかという点に留意しつつ、（１）（２）を本節で、（３）（４）を次節で、それぞれ検討する。

- （１）「ず」と共にあるもの 一三例
- （２）「じ」と共にあるもの 三例
- （３）「難し」と共にあるもの 一例
- （４）反語文と共にあるもの 五例

〔計 一二例〕

第一に、「ず」による否定述語とともに用いられたものは十三例見える（「で」「なし」によるものも含む）。

このうち次のような例では、ダニの接する語句自体に「小」なるあり方が備わっていて、右に述べたダニのはたらきかたが明瞭に見て取られよう。

①山城の淀の若菰かりにだに來ぬ人たのむ我ぞはかなき

(恋五・七五九、不知)

②野とならばうづらとなきて年は経むかりにだにやはきみは来ざらむ

(雑下・九七二、不知)

③声をだに聞かで別る、魂よりもなき床に寝む君ぞかなしき

(哀傷・八五八、不知)

④あはれてふ言だになくは何をかは恋のみだれの束緒にせむ

(恋一・五〇二、不知)

①②とも、「仮に」というありかたにおいてだけでも「来る」ということが成り立たないことを言うことで、最終的に、全く来ないことを表わすものとなっている。「来る」ことの本格度というものを考えてみると、「本気で」来ることに較べて「仮に」来ることのほうが本格性が低いことは縷説を要しない。ダニは、その低いほうの要素を示しつつ否定を受けることで「來訪の皆無性」を表わすのに与っていると見えよう。①ではそうした意味が単純に表わされているのに対して、②では否定的事態に対してさらに反語がかぶさることによって「仮にぐらいは来てくださいますでしょう」といった意味を表わすことになるが、「ダニ……否定」部分のありよう自体は①と変わらない。へ相対的輕少性」の意義もまた、そのような形で發揮されるわけである。

③も同様である。男が他国に出かけている時に俄かに病臥した妻が、死の間に詠んだ歌である。二人の人間が交渉を持つことの本格度というものを考えてみると、当人を目の当たりに見ることに較べれば、声(だけ)を聞くというのは、より低い段階に属する。ダニは、そのような要素に接してそれが小さな要因であることを明示するにはたらいっている。最終的

には、それをしも斥けることで「交渉の皆無性」を表わすものとなるわけである。

④は仮定条件句で用いられているが、ここでのダニは否定との関わりのほうが第一義的であろう。「あはれ」という溜め息にも似た言葉が発することによって辛うじて心の乱れを整えることもできるのに、もし仮にその「あはれ」という言葉だけさえもないとすれば心の乱れはどう整えればよいのか——そんな意味あいを詠み込んだ歌だと言えよう。ここでもダニは、小さな要因を示しつつ否定を受けることで、「統御手段の皆無性」を表わすのに与っているわけである。

また、次のような例にあつても、ダニの接する語句の輕少要因性は比較的簡単に認めることができる。

⑤深山には松の雪だにきえなくに宮こは野べのわかまつみけり

(春上・一八、不知)

⑥流いづる方だに見えぬ涙河沖ひむ時や底はしられむ

(物名・四六六、都良香)

⑦ひとを思心は我にあらねばや身のまどふだに知られざるらむ

(恋一・五二三、不知)

⑧知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらにたつ覽

(恋三・六七六、伊勢)

⑨うきながらけぬる泡ともなりなむながれてとだに頼まれぬ身は

(恋五・八二七、友則)

⑤は、春の到来の遅速を対照する形で詠んでいる。松の梢にかかった雪は、陽も受けやすく滑り落ちて消えやすいのだから、雪解けということが先ず第一に生ずるものとして期待されよう。それは、全体から見ればほんの糸口に過ぎないものであって、いわば端緒としての輕少性を帯びている。ダニは、そのような要素を示しつつ否定を受けることによって、「春らしさの皆無性」を表わすにはたらいっていると見えよう。

⑥は、「おき火」を詠み込んだ物の名の歌である。上二句は「流れて来るのがどこからなのか、それだけさえも見えない」の意であろう。見えるものの範囲というものを考えた場合、川の流れが見えればそれがどこから流れて来るのかも自然に見えてよいはずだから、「流れいづる方」というのは、最も見えやすい部類に属するであろう。「見る」ということにとつて最も初歩的な事項だとも言える。ダニは、そうした要素を示しつつ否定を受けることによつて、「見える範囲の皆無性」を表わすことになるわけである。この歌の場合、「表層のものさえ見えないのだから、まして深部に横たわる“底”などは見えるわけがない」といった含みを引き出すことも十分に可能であろう。実際の表現としても、そうした類推義を踏まえつつ、「水が涸れたならば（涙が出尽くしたならば）、そのような時にでも“底”が見えるのであろうか」といった意味あいを詠み込んでいる。そうした意味で、類推表現としてのありようをも併せ持っていると見えよう。

⑦は、我を見失った心の状態を詠み込んだ歌である。恋の想いに心が乱れた人にとつて、明晰な認識を保つことは難しいが、「自分の心が乱れている」ということそのことを知ることは辛うじて残されてもよさそうな事柄であつて、そうした意味で軽少なありかたを帯びる。ダニは、そのような要素に接してその軽少要因性を示すのにはたらいっている。全体としては、それをしも斥けることで、「可能な認識の皆無性」を表わすものとなっている。

⑧は、思いがけず浮き名の立つたことを詠んでいる。恋の想いが人に知られる原因としては、「人にこっそり打ち明ける」「人前で思いつめた素振りをみせる」といったことが大きなものとして考えられる。それに較べれば、「枕をする」などというのは所詮は俗信にすぎず、寝室内での取るに足らぬ仕業でしかない。そうした意味で軽少な要因であると認められよう。ダニは、そのような要素を示しつつ否定と組み合わせることで「漏洩原因の皆無性」を表わすのに働いていると言えよう。

⑨は、「泡のように浮き身」憂き身のまま消えてしまいたい、どうせ生きながらえていても希望がないのだから」といった意味を詠み込んでいる。望みが叶うということにとつて最も願わしいのは今現にそうなることであるが、そうならないなら、生きながらえて不定の未来に望みをつなぐのがせめてもの手立てとなる。ここでのダニは、そうした低い手立てにおいても望みの持てないことを言うことで、「希望の皆無性」を表わすのに参加していると言えよう（なお、友則には《水の泡のきえでうき身といひながら流て猶もたのまる、哉（恋五・七九二）》の詠があつて、こちらでは生きながらえることに淡い期待を抱いている）。

さらに、次に掲げるような例にあつても、歌の意味をよく勘案すれば、ダニが軽少な要因性を示すのにはたらいっているありさまが観察されよう。

⑩春やとき花やおそきと聞き分かむ鶯だにも鳴かずもあるかな

（春上・一〇、藤原言直）

⑪さくら花春くは、れる年だにも人のこゝろに飽かれやはせぬ

（春上・六一、伊勢）

⑫富士の嶺のならぬおもひに燃えはもえ神だに消たぬ空しけぶりを

（雑体・一〇二八、紀乳母）

⑬うばたまの夢に何かはなぐさまむ現にだにも飽かぬ心を

（物名・四四九、深養父）

⑩は、春の気配の未到来を詠んだ歌である。鶯は、その異名が示すとおり春の「はじめり」を告げる鳥であり、春という季節の糸口とも言ふべき位置を占める。そうした意味で軽少なありかたを帯びている。ダニもまた、そのような要素を示しつつ否定のはたらきを受けることで「春らしさの皆無性」を表わすに至っていると見えよう。

⑪は、詞書に「弥生に閏月ありける年、よみける」とある。慌ただしく散り過ぎる桜の花を心ゆくまで賞翫することなど今までにできたためしがなく、満たされぬ思いのままに季節の過ぎ去つてゆくのが常だが、そうし

た中であつて、閏三月の加わる年というのは、もしかしたらその願いが叶うかもしれないごく稀な機会であつて、そうした意味で「春くは、れる年」に軽少性を了解することができる。ダニもまたそのような語句を示しつつ否定と結び付くことで「心満たされることの皆無性」を表わすと見えよう。歌全体としてはさらに反語がかぶさることで「そんなことがあつてよいものか」といった気息が加わり、ひいては「せめて今年ぐらいいは」といった意味あいもまた形成されるに至るわけである（注⑦）。

⑫は、誹諧歌として掲げられている。ここでの「神」は、それ自体としては大きな要因のようにも見えるが、「富士山の煙を消す」などということとはそもそも人間の力には及びもつかないことであつて、もしそれができるものがあるとすればそれを措いてほかに有力な候補の思い浮かばないような、ほんの僅かな担い手として持ち出されていると見ることも許されよう。そうした意味で軽少性を認めることができる。ダニもまた、そのような要素を挙げ示すことによつて、鎮火をめぐる「全き不可能性」を表わすのに与つていると言えよう。

⑬は「かはなくさ」を詠み込んだ物名歌である。ここでも右と同様に解することができようかと思われる。「現」は、もし心満たされるといふことがありうるとすれば、これを措いてほかにふさわしいものがあるとは思えないような得難いケースであり、そうした意味で軽少要因性を帯びると考えることも許されよう。ダニもまた、そのようなものとして軽少要因性を示しつつ否定を受けることで、「欲求充足の皆無性」を表わすに至ると見えよう。歌全体としては「現」にさえ不満足なのだから、まして「夢」に満足できるわけがない」といった意味の展開を見て、類推の構造を実現するものともなつている（注⑧）。

第二に、「しじ」の形を取つて否定的な意志を表わす述語とともに用いられるものが三例ある（この形のもはもう一例あるが、それは実現を望む意味との結びつきを主眼とするものなので、既に前節で用例⑦として扱

つた）。

①塵をだに据ゑじとぞ思咲きしより妹とわが寝るとこ夏の花

（夏・一六七、躬恒）

②夢にだに見ゆとは見えじ朝なくわが面影にはづる身なれば

（恋四・六八一、伊勢）

③今よりは植ゑてだに見じ花す、きはにいづる秋はわびしかりけり

（秋上・二四二、平貞文）

①は、隣の家から常夏の花を請われたときに、断りの返事に詠んだ歌である。上二句を逐語的にたどると、「塵をだけでも据えることはするまいと思ふ」となる。花を害するものとして、たとえば花を切り取るといったことに較べれば、塵が積もることなど、ごく軽微なものに過ぎない。上二句は、そうした軽微な要因を示しつつ、それをしも拒むことによつて、徹底した愛護の気持を表わすものとなつている。ダニもまた、そのような表現の一環として、「小」なる要素を示すのに用いられていると言えよう。

②は、「容貌の衰えを恥じているので、夢にだけでも“現われた”とは見られないようにしよう」との詠である。人と人とが交渉を持つことの本格度というものを考えると、夢で逢うことは現実にあい見えることに較べて存在感が薄く、その意味でより低い段階に属すること絮説に及ぶまい。それをしも拒むことで「会見の意思の皆無性」を表わすのが、上二句の趣意であろう。ここでもダニは、そのような表現の一環として「小」なる要素を示すのに用いられているわけである。

③は、「薄の穂が出るのを見ると秋を感じてわびしくなるから、薄を庭に植えたりはするまい」との大意であるが、「植ゑてだに見じ」については諸説がある（竹岡『全評釈』上、六六六―六七頁）。姑く竹岡氏の解によるならば、「わざわざ野外まで出かけて見るなどというのほもちろんのこと）庭に植えておいて見るといふことだけであつても、しないつもりだ」といった意味になる。鑑賞のための手順として最も煩雑度の低い場合をダ

二によって示しつつ、それをしも斥けることで「鑑賞する意向の皆無性」を表わすと見ることができよう。「相対的輕少性」の意義もまた、そのような形で發揮されるわけである。もっとも遠鏡では「野原で見かけるのは仕方がないとしても、せめて庭に植えておいて見るといふことだけでも避けたい」の意と取っている（全集三、八五頁）。この場合は「じ」に含まれる意志の側面との関わりを重視していることになる。否定的意志における「せめてもの願ひ」である。そのように解した場合でも、ダニの「相対的輕少性」の意義自体は変わらないと言えよう。

### 三 否定述語（其二）・肯定述語

第三に、準否定的な述語とともに用いられるものが一例見える。

①夢にだに逢ふこと難くなりゆくは我や寝をぬぬ人やわするる、

（恋五・七六七、不知）

歌意は「夢にだけでも逢うことが難しくなるのは、私が眠れないからなのか、それとも相手が私のことを忘れているからなのか」というものである。

「難し」を「成立しにくい」と考えるなら、「成立しない」ことを表わす否定文に準ずることができる。ダニもまた、そうした述語との組み合わせにおいて、「逢うこと」の九分九厘の「不成立」を表わすものになっていると言えよう。

第四に、反語的な意味を表わす述語とともに用いられたものが五例見える。

①吹風をなきてうら見ようくひすは我やは花に手だにふれたる

（春下・一〇六、不知）

②声たえず鳴けやうくひす一年にふた、びとだに來べき春かは

（春下・一三一、興風）

③山科のおとはの山のおとにだに人の知るべくわが恋ひめかも

④山科のおとはの滝のおとにだに人のしるべくわがこひめかも  
（恋三・六六四、不知）

（墨滅・一一〇九、采女）

⑤今日のみと春をおもはぬ時だにも立ことやすき花のかけかは

（春下・一三四、躬恒）

①は、鶯が花の散るのを惜しんで鳴くのに対して、「恨むなら風を恨んでほしい、私は手だつて触れていない」と弁疏する体の歌である。下二句を逐字的にたどると、「私は花に手だけでも触れたらどうか（触れていない）」となる。揺すぶったり折り取ったりすることに較べると、「手を触れる」ことは、花を散らすものになる事柄としてごく輕微なものでしかない。

ダニは、そのような要素の輕少性を示しつつ反語による翻しを受けることによつて「答責事項の皆無性」を表わすに至っている。「相対的輕少性」の意義もまた、そのような形で發揮されているわけである。

②は、鶯が花を惜しんで鳴くのを促す体の歌である。下三句を逐字的にたどると、「一年に二度だけでも来るはずの春だろうか（一度しか来ない）」となる。日常的な数の世界にあつて、「二」は複数性をおびた最も小さな数であろう。ダニもまた、その「小」なるあり方を示しつつ、「それだけでも繰り返されるだろうか」と翻しを受けることで、「反復の皆無性」來訪の唯一回性」を表わすに至るのだと言えよう。

③④は采女の歌とされるものである（③の作者は左注による）。「音にだに」は、「（単なる）噂にだけでも」の意であろう。恋の事情を「人が知る」ことをめぐる本格度というものを考えると、当事者から直接聞くことに較べて、噂に聞いて知ることは、その確実度において遙かに低い段階に属すると言えよう。ダニはそのような要素の輕少性示しつつ翻しを受けることによつて、「人に知られる懼れの皆無性」を表わすのに参加している。「相対的輕少性」の意義もまた、そうした表現の一環として活かされているわけである。



最後に⑤は、詞書に「亭子院歌合に、春の果の歌」とある。花の下から立ち去るに際して後ろ髪を引かれる思いは、「今日で春は終わりだ」という日に較べれば、そうでない日はまだしも少なくとも済むはずであり、その意味で軽少性を備えると言えよう。ここでのダニは、そうした意味での小なる要素を掲げるのにはたらいっている。歌全体としては、それをしも翻すことによつて、「立ち去りやすさの皆無性」を表わすものとなつていよう。

以上、否定的な意味を有する述語とともに用いられたもの二十二例について見てきた。これに対して、肯定述語とともに用いられたものとして、次の四例がある。

①時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだにこひしき物を

(哀傷・八三九、忠岑)

②雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふく覧

(春下・八六、躬恒)

③きみを思ひおきつの浜になく鶴のたづね来ればぞありとだに聞く

(雑上・九一四、貫之)

④白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ

(雑下・九四五、惟喬親王)

①は、友則が亡くなったときに忠岑の詠んだ歌である。時折しも秋であった。歌意は、「よりによつてこんな悲しい季節に逝つてしまつてよいものか。生きている人を見ているだけでも恋しいのに」というものである。人恋しさの思いを喚び起こす事柄として、永の別れに較べるならば、生きた人間を見ていることは、それほど大きな力は持たないはずである。下二句は、そのような軽少要因性をダニによつて示しつつ、それだけでも十分に恋しさの思いを搔きたてられることを詠んでいる。まして永別ともなれば、その悲しみはいかほどであろうか。上三句ではそのような類推義を念頭に置きつつ、秋という季節にこの世を去つたことへの痛惜の情を叙していると言えよう。そのような形で類推の構造がもたらされているわけであ

る。

②も同様である。「ひたすら雪のように花が散っている、ただそれだけでも惜しいのに、この上どう激しく散れというので風が吹くのだらうか」というのが一首の意である(注⑨)。花を惜しむ気持にとつて、風が吹き散らすことに較べれば、花が自分から散ることはまだしも我慢のしやすいことである。その意味で軽少な要因であると言えよう。上二句では、そのような軽少な要因であっても花を惜しむ気持をかきたてるのに十分であることを表わすのにダニが用いられている。「まして、風に散らされるのは残念至極だ」の含みもまたそこから自ずと生ずるが、実際の表現では、そうした類推義をふまえた上で、それと反戻する事態への訝りの気持を投げかけている。そうした形で、類推の構造が形作られていると言えよう。

こうして、右の二例にあつては類推の基盤となる事態を整えるのにへ相対的軽少性<の意義が供されていたが(注⑩)、次の二例では「辛うじての成立」を表わすのにそれが用いられている(注⑪)。

③は、貫之が和泉の国に居たとき、藤原忠房が大和の国から尋ねてきて詠んだ歌である(忠房は大和の守であった)。下二句は「こうやつて尋ねてきたからこそ、あなたが(無事で)いらつしやるということだけでも、知ることがでるのだ」の意であろう。人の消息を知ることが本格度というものを考えてみると、生活の細目から心情の幾微まで余すことなく知ることと較べて、単に無事で居ることだけを知るといふのは、ごく軽微なものでしかない。末句は、そうした軽微なことだけでもとにかく知り得たことを言っている。この歌の場合、そこから「まして」云々の類推義へと向かうのではなく、ほんの僅かながらもの知見であるということ自体に眼目があると言えよう。そうした意味で、「辛うじての成立」を表わすのにダニが用いられていると言つてよいかと思われる。

④は、「こんな殺風景なところであつても、いざ住んでみれば住んでしまえるものだ」との思いを詠んだものである。居住環境としての快適度と

いうものを考えてみると、白雲がしよちゆうたなびいている山の中などというのは、およそ快適さとは無縁の、取るに足らぬ場所であろう。こどもダニは、そのような軽少要因性を示すことによって、「辛うじての成立」を表わすにはたらいっていると認められよう。

### むすび

以上、古今和歌集に見えるダニ凡そ三十八例を取り上げて、その使われ方を見てきた。「相対的軽少性」というこの語の基本的意義が、それぞれの用法において一貫して発揮されているありさまを観察することができたのではないかと思われる。その大要を記せば、①願望表現や②仮定条件句にあつては願望や仮定の内容を相対的に低い段階へと位置づけることによつて「せめてもの願い」や「最低十分条件」を表わすのに加わり、③否定述語との組み合わせでは小なる要素を提示しつづつ否定を受けることで「皆無性」を表わすのに与り、④肯定述語にあつても、類推の基盤となること「がらを形作り、ないしは辛うじての成立を表わすことにおいて、小なる要素の提示にはたらいっていたのだと言えよう。「相対的軽少性」の意義もまた、そのような形で、おのおのの用法に遍く存したわけである。

同時にこのことは、この語が根本的な意味での類推性を帯びることをも意味していよう。たとえば願望用法では「願ったこと以上のことがらが実現すれば、なおのこと嬉しいが」の余意が、仮定条件ならば「これ以上の条件が満たされれば、まして後件は成り立ちやすいが」の含みが、それぞれ伴なわれるであろうし、否定であれば「もっと大きな要素の場合は、まして成り立たない」というところから皆無性の意味が表わされることになつていると言えよう。成章が《同じ心を、あらまざすしておいらかに詠めば、くらぶる心あらはるるなり》(文献⑮、二四四頁)と言うのも、こうした根本的な類推性を指摘したものととして受け止めることができる。それ

は、「相対的軽少性」の意義が二事項間の軽重差を示すものであることから生ずるところの、根本的な類推性である。そしてさらに成章が、自身の用意した「サヘ・ナリトモ・デモ」の三つの訳語(里言)について《三の里言、一にかへる心を味はふべし》(文献⑮、二四五頁)と言うとき、この語の統一的理解についても語られていたと言えよう。三つの訳語に反映される最終的な文意味は、一なる基本義と異なる構文環境との、その相乗効果において形成されると考えられているからである。本稿では、その統一の要となる基本義を、「相対的軽少性」という点に求めてきたのであった。

最後に、このような基本的意義の把握が副助詞という語類の研究にとつてどのような問題性を帯びるかについて、些かの考えを記しておきたい。この語類の創設が山田孝雄によることは周知の事実であるが(文献②、五八七頁)、その淵源は富士谷成章の『あゆひ抄』に求めることができる。それは、《吾人のこの研究も実に氏「成章・引用者注」の賚多きに居る》(文献②、五八六頁)という文言からも明らかに知られよう。そして、その淵源に含まれる可能性を明示的に展開したのが森重敏氏の「群数および程度量としての副助詞」(文献⑳)であった。ここに言われる群数とは、その「一項明指・他項暗指」の用語が示すとおり、項目の集合を前提としつつ(注⑫)その項目間に単なる並立という以上の特殊化された関係が示されることの謂であり(注⑬)、また程度量とは文字通り「程度を量る」ことを指すものであつて、因果関係的な二事項の関係をめぐるものから数量詞的な分量と関わるものまでを含む(注⑭)。この二つを『あゆひ抄』の「能美家・随尔家」(注⑮)に即して見るならば次のようにならう。

「能美家」に属するのはノミ・バカリ・マデの三語であるが、そのいわば標札としてノミが採られていることは蓋し意義深いものがある。「能美家」は限定を根幹とする語類であり、であるが故に限定専一にはたらくノミが標擧されたのである。副助詞の概念からすれば純群数的な語だとい

うことになる。バカリが程度用法を有することも、程度の限界を画するという点でこの家の一員たることを妨げないが、先の二面から見れば、群数性と程度量性とは用法の異なりにおいて分属する。マデもまた限界を画定する限りに群数性を備えるが、画定に働く意味が連続量的である点で既に量性を帯びるとともに、程度用法を併せ持つ点においてバカリと通うであろう。

他方、「随尔家」に属するのが、ここで取り上げたダニ、ならびにスラとサへとであった。これらはいずれも二事項の関係を表わす点で群数性を有するが、その関係規定が根本的に軽重差に基づく限りに程度量性をも帯びる。そして、この程度量性をそれ自体として担うのが先のバカリやマデの程度用法だったわけである。「能美家」にあつては二つの性質が分離的であるのに対して、「随尔家」では融合的に備わると概括することもできる。純程度量的な語は二つの家に見えないが、現代語まで拡張ればホドのような語をそれに宛てることができよう(注⑩)。

こうして群数性と程度量性とは副助詞という語類を構成する二つの論理的契機である(注⑪)。副助詞研究に際しては各語の根本義を探求してその個性を究めることが基礎をなすこと言うを俟たないが、究明された根本義に基づいて個々の副助詞における両契機分有の種々相を明らかにすることもまた同時に必要とされよう。それは、より高次の個性の解明であるとともにその統一であり、副助詞概念自体の深化でもあるからである。そして初めて森重氏の切り開いた地平をさらに先へ進むことも可能となるのである。ダニの有する「相対的軽少性」の意義は、そのような副助詞研究の課題を示唆してやまない。

〔付記〕古今集の本文は次の書物によつた。

・新日本古典文学大系『古今和歌集』(小島憲之新井栄蔵 校注 一九八九 岩波書店)

『古今和歌集』の副助詞ダニ——「相対的軽少性」の意義をめぐって——

用例の掲出に際しては、次のような行き方を取った。

- ・末尾に(部立・大観番号、作者)を記した。
- ・部立てや作者は、「春歌上↓春上」「小野篁朝臣↓篁」のように適宜節略した。
- ・「よみ人しらず」は「不知」で示した。

・歴史的仮名遣いが傍書されているものはそれに従った。

歌の解釈には次の書物を参看した。

- ・本居宣長(一七九七)『古今和歌集遠鏡』(全集・三 一九六九 筑摩書房)
- ・日本古典文学大系『古今和歌集』(佐伯梅友校注 一九五八 岩波書店)
- ・竹岡正夫(一九七六)『古今和歌集全評釈 上・下』(右文書院)

これらの書物の参照に際しては、「新大系」「遠鏡」「旧大系」「竹岡『全評釈』」等々の略称を適宜用いた。

## 注

(注①) 肯定・否定は、命令・禁止のようなものも含めればあらゆる文種類に亘ると言えるが、ここでは願望表現や仮定条件句以外のものを二分するものとして用いている。

(注②) 文献⑪⑫⑬や、文献⑩では、量性の意味領域において働くものとして副助詞を捉えていたが、本稿ではより分析的なこの考え方を取る。そうすることの意味については、「むすび」を参照されたい。

(注③) 成章も「べし」に願望表現に通う側面を見ていたらしい。「稿本あゆみ抄」ではダニの用法を三つに分けているが、その二つ目は《あつらへん心をうけ。又將をうけておもひたつ心あるは皆ナリトモといふセメテコレナリトモの心也》とあり、「。」の部分に《又可をうけ》の傍書が見える(文献⑧、三九三頁。文献⑨、一一〇頁)

(注④) この歌は大鏡でも一部引用言及されている(雑々物語。文献⑬、九一頁)

(注⑤) 「最低十分条件」を表わすダニについては、文献⑪(一四一―四三頁)、文献⑫(二六九―七一頁)、文献⑬(九〇―九一頁)などで扱っている。  
 (注⑥) 文献⑫で「語用論的最上級」(九六頁)「弱数量叙述」(九二頁)などと呼ばれたものに相当する。ダニでは前者が多いが、後者にあたるものも含まれる。

(注⑦) この歌については、「桜花」を呼びかけの言葉と見て「飽かれやはせぬ」を「飽かれよかし」の意と取る解が、夙く『顕注密勘』に見える(竹岡『全評釈』上、三六九頁)。現代語で「勉強しないのかい?」と尋ねることが「勉強しなさいよ」の意味になるのに比せられるとも言おうか。こう読むならばダニは最低限願望の用法に近くなる。『遠鏡』もこの方向で解している。曰く《桜花ヨ イツモノ年ハ早ウチルトモ セメテ春ノ一月加ハツテ長イ今年バカリナリトモ 人ノ心ニタンノウスルホドユルリト咲テアツタガヨイニ ナゼニイツモト同ジャウニ今年モ早ウチルゾイ》(全集三、四五頁)。末尾の訳し方を見れば全体としては願いの満たされぬ思いを投げかける点に主眼を置いているようである。「あゆひ抄」が「疑属」の「何やは何」でこの歌を取り上げて「飽カルル事ハナラヌカヤ」(文献⑮、一四九頁)と里しているのも同様の線で受け止めることができよう。ダニの接する語句とは言えば、詠歌の根柢にある願いの心から「今年だけでも」といった意味での軽少性(最低限性)と言ってもよいが、が生じてくると考えてよいのではないかと思われる。こうしてこの歌は、願望表現の用法に引き寄せた解も成り立ちうるわけだが(稿本あゆひ抄)でもそのように解している。文献⑧、三九四頁、否定述語と共にする点を重視してここで扱うことにした。

(注⑧) 文献⑬(一〇〇頁)では「飽かぬ」を「嫌い」という一つの述語と見なす解をとったが、ここでは否定の形を重んじてこのように解してみた。  
 (注⑨) 「だにあるを」については、姑く「惜しい」に類する意味を補う解にしたがっておく(文献③)。文献⑱にもこの種の語法への言及が見える。  
 (注⑩) 類推表現と関わるダニについては、文献①(一四七頁以下)、文献⑫(二七七頁以下)、文献⑬(九六頁以下)などで扱っている。  
 (注⑪) 「辛うじての成立」を表わすダニについては、文献①(一五〇―五一頁)、文献⑫(一八三―八五頁)、文献⑬(一〇一頁)などで扱っている。  
 (注⑫) 文献①②の「前提集合」は、この点を直接的に明示化したものと捉えることができる。

(注⑬) 「例示—臚化的暗指、特指—許容的暗指、特指—拒否的暗指」といった範疇が立てられている。この種の意味は、文献⑤(三九頁)では「他

項類比的な副助詞の意味」と把握されている。  
 (注⑭) 「現実程度量、実現程度量、連続的高度化量、概略量、明確量」などの範疇が立てられている。

(注⑮) 版本の表記に従う(文献⑭、一八五頁・一九一頁)。  
 (注⑯) 論理的二契機の研究史的中心に据えたためにこのような述べ方になったが、成章理解という点に重きを置くならば、「能美家」は他の要素と切れて自体的であり、「随尔家」は他の要素と連なって関係的であると捉えるほうがよいかも知れない。なお、『あゆひ抄』の「能美家・随尔家」については、文献⑥で主題的に論及されている。

(注⑰) このうちの一面だけに指目するのでは、この語類を真にトータルに捉えるには不十分なのではないかとの疑義が、文献⑯(一一八―九頁)、文献⑰(九六頁以下)などに提出されている。

### 参考文献

- ① 安部朋世(一九九九)「ダケの位置と限定のあり方—名詞句ダケ文とダケダ文—」『日本語科学』六号
- ② 安部朋世(二〇〇二)「とりたて」のマデの意味分析『鶴見大学紀要』三九号
- ③ 江口正弘(一九八〇)「源氏物語・若紫の「いたづらに沈めるだにあるを」の解釈—「だにある」の語法について—」『国語教育研究』二六・上(広島大学)
- ④ 加納協三郎(一九三八)「だに」「すら」の用法上の差異に就て」『国語と国文学』一五巻六号
- ⑤ 川端善明(一九六三)「助詞「も」の説—二、心もものに鳴く千鳥かも—」『万葉』四八号
- ⑥ 小柳智一(二〇一〇)「あゆひ抄」の副助詞研究『国語と国文学』八七巻一七号
- ⑦ 鈴木ひとみ(二〇〇五)「副助詞サエ(サへ)の用法とその変遷—ダニとの関連において—」『日本語学論集』一号(東京大学)
- ⑧ 竹岡正夫(編)(一九六一)『富士谷成章全集・上』(風間書房)
- ⑨ 竹岡正夫(解説)(一九七八)『稿本あゆひ抄』(勉誠社文庫・四五)
- ⑩ 田中敏生(二〇〇三)「集中的専一性における項目限定性と事態波及性—古今和歌集における副助詞ノミの意味的なたらき方をめぐって—」藤岡忠美

先生喜寿記念論文集『古代中世和歌文学の研究』（和泉書院）所収

- ⑪ 田中敏生（二〇〇七）『蜻蛉日記』における副助詞タニの諸用法とその連関——「相対的軽少性」の意義に基づく統一的理解の試み——『四国大学紀要』二二八号
- ⑫ 田中敏生（二〇〇八）『枕草子』の副助詞タニ——中古における「相対的軽少性」の意義の一確認——『四国大学紀要』三〇号
- ⑬ 田中敏生（二〇〇八）『大鏡』の副助詞タニ——平安時代における「相対的軽少性」の意義の一確認——『言語文化』六号
- ⑭ 中田祝夫（解説）（一九七七）『あゆひ抄』（勉誠社文庫・一六）
- ⑮ 中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆひ抄新注』（風間書房）
- ⑯ 丹羽哲也（一九九二）『副助詞における程度と取り立て』『人文研究』四四巻一三分冊（大阪市立大学）
- ⑰ 丹羽哲也（二〇〇六）『取り立て』の概念と「取り立て助詞」の設定について『文学史研究』四六（大阪市立大学）
- ⑱ 野口理世（二〇〇〇）『古今和歌集の「だに」について』『高知大國文』三〇号
- ⑲ 宮田和一郎（一九六〇）『古今和歌集解釈の再吟味（八）』『解釈』六巻七・八号
- ⑳ 森重 敏（一九五四）『群数および程度量としての副助詞』『国語国文』二三巻二号
- ㉑ 山田小枝（一九九七）『否定対極表現』（多賀出版）
- ㉒ 山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』（宝文館）  
（田中敏生 四国大学文学部国語学研究室）